

バーン＝ジョーンズの芸術と生い立ち

デザイン学科

白石 和也

Burne-Jones ; his Art and Childhood

II

シュールレアリズムは合理主義や自然主義とは異なった意識下の世界や夢の世界を追ってフロイトの精神分析や潜在意識の理論と結びつくものへ発展した。それ以前にバーン＝ジョーンズは、確かに多くの同時代の画家たちほど無骨で表面的でない視覚隠喩の方法を見つけ出し、非常に深遠で総合的な形でそれを用いた。彼は性的な隠喩である蛇とか男根などを類推させる形を用いることなく、また大衆の広告心理学よりも深層にある意識下の表現形式にまで画像を到達させて彼はいかにも内省的な分析を表現したのである。バーン＝ジョーンズが本格的に絵を描き始めたのは、イギリスがコンスタブル風の風景の修辞学を確信した後、ロマン主義を享受し、すでにその放逸さが過ぎ去ろうとしていた時期でもあった。新世代の芸術家たちが初期のロマン主義が堂々と是認されることに飽きあきしていた状態のなかで、彼の図像はいち早くその第二期を明瞭に宣言するものとなった。彼は新しい想像の世界を見出して、想像がどのようにして作用するかを発見し、想像の内部の深い所へ行き着きたいと願い、内省的表現をめざしたのである。

今日に至ってバーン＝ジョーンズが同時代の人々と今日の世界に向けて示したことを認識するのは、いわば私たち自身を知ることでもあるので論じるに値すると考える。彼の主題を理解するには先ず、彼が具象的絵画の最後の時期に造形活動をした点を考えておかねばならないであろう。つまり彼は具象絵画に没頭しながら、それを印象派以後の画

家たちのように自然形態を放棄する方向へ向うことなく、むしろそれを観念の抽象世界へ飛び込む踏切り板に用いて抽象化へ突入していったのである。確かに彼は具象的な形態を限界にまで誇張はしたが、少なくとも私たちが自然界で見えるがままのものを直接に参考にして描写し、同時にそれらを抽象的な要素である一線や色彩、構図などの手段によってまるで魔法でも使ったかのようにモチーフに図像独特の生命を吹き込んだり、評釈したりしたのである。このことが当時の人々にまったく理解できなかったことは、彼がオールド・ウォタカラー・ソサイエティに1865年に出品した作品についての『アート・ジャーナル』の次のような批評家たちの長たらしい言及を挙げれば明らかになるであろう。バーン＝ジョーンズはこのときに〈グリーン・サマー〉、〈星占い〉、〈ニミューの誘惑〉、〈クピドとデライト〉などの作品を出品した。

「・・・確かにこの芸術家が人々の心を共鳴させる何らかの才能を持ち合わせているのを私たちはほぼ喜んで認めるし、彼のゆるぎない中世主義も魅力がないわけではない。グロテスクと境を接し、不可能なことにさえ触れる彼の古風趣味は月並な今日の生活様式からすくなくとも遥かに遊離しているのに、密着しているように感じるのは驚嘆すべきことで、いわば絵画の奇跡的な珍種である。・・・この画家の色彩には柔らかな、ほのかな輝きがあり、〈盲目の愛〉というようなかなり慢心な作例にみるように、なかには独創的な主題の作品もあることは否定できない。そして〈グリーン・サマー〉の構図で表わされる感情には、詩情がないわけで

はない。・・・しかし何ゆえに彼が通常の解剖学的比例や人体の造りとして認められている基本を見逃すのか問いたいものである。それから、彼がなぜ、着ている衣服の形態と関連して人物の衣文表現をしないのかも知りたい。重力の法則から推測して十分に確かめられることになっている、襞やマッサによる衣文表現をなぜ当てはめないのだろうか。さらに真相をただしたいのは、ジョーンズ氏がカラリスト（色彩中心の創作者）であるなら、どうしてポッカチョ風の構図の〈グリーン・サマー〉で人物に緑の服を着せたのか、またその野外パーティの人物たちに部屋着を脱ぎ捨てて緑の草原に座らせ、科学的自明の理であり、すでに確立された色彩芸術の法則にいどみかかったのは一体何なのであろうか¹⁾。

その後もバーン＝ジョーンズが悪から最悪にならないように自然の観察に向くような助言が続くので、同時代の人々が自然に従わず、独自の法則を画面に創り出す彼の芸術を理解できなかったことが分かる。自然の色彩や衣文表現を正しく表わすことは彼の関心事では決してなかったのであり、絵によって美的生命を灯そうとしたのである。だから彼の「グリーン・サマー」という作品は「緑の色調による調和」をめざしたのであって、事実上の出来事の写真的再現ではなかった。このような彼の主観的な反応の探究がシュールリアリストや表現主義を予測させるが、この点を強調し過ぎることは彼の図像の理解をかえって妨げかねないようにも思える。彼の表現したものは一人の人間の自己発見の記録といえるものであり、彼が偉大なのは彼の生涯の作品が個人だけに留らず、あらゆる人々の共通する象徴になったことである。芸術家として無知から脱出するために小さな画面でも人間の大きな苦悩を描いたが、その苦悩を絵画の内容的脈絡だけでなく、彼の技術的な発展においても長期にしかも苦勞しながら探求を続けたのである。最初はロセッティの影響を受けて「愛」

のテーマを小規模の絵で表わし、媒体が提供できる可能性を探求することから始まり、普遍的というよりは個人的なもので、優しくロマチックな特質を備えながらも本質的には神秘的で、共鳴している少数の人にしか訴えるものでなかった。その後彼はもっと深層に訴えるものを探るようになり、より普遍性のある図像を求めだした。テーマはたいして変らなかったが、以前の親密なコミュニケーションのレベルをむしろ拒絶して広く通じる言葉に託して原型的なモチーフを表現したのである。そうすることで彼は自分の絵画を小品的なイギリス芸術のよどみから救い出し、ヨーロッパの文化的発展の主流に据えたのであった。それから晩年には再び初期の親密な図像に戻ると同時に、驚くほどの巧みな技を示す一連の大作も平行して制作するようになった。そして技術の簡潔さと内容の精確さで著名になったが、見える外観の真相を越える個人の真実を求めることで、ラファエル前派の思想を二十世紀へも取り入れることを可能にした。今日の芸術ではこの種の主観的な現実が開放的になり、私たちのごく日常的な経験として当たり前のことに思えるようになったが、いち早く私たちがそれを感じるように周辺を整える方向を開拓したのはこのようなラファエル前派の画家たちであった。

バーン＝ジョーンズの内省的な絵画を理解するには、現代の心理学が示唆するように、彼の幼少の頃の経験が重要に思えるので、先ずここで彼の生い立ちについて検討することにする。

第一章 バーン＝ジョーンズの生い立ち。

エドワード・コーリー・バーン＝ジョーンズの父親エドワード・リチャード・ジョーンズはロンドン生まれであったが、母親エリザベス・コーリーの郷里であるバーミンガムに行き、そのベネッツ・ヒル11番で額縁や金飾りをする職人としてささやかに店を構えていた。リチャードが三十二歳の時の1833年8月28日にエドワードは生まれた。

1) “Burne-Jones” Martin Harrison & Bill Waters, Barrie E. Jenkins London, 1973, P. 84.

ジョーンズ夫妻は姉娘のイーデスを幼くして亡くしたので、その失われた幸福を取り戻そうと、生まれたばかりの第二子の息子である彼にすべての希望を託した。しかし彼が産み落とされた六日後に母親が急逝したためにその望みは突然に崩れ去った。

父親のリチャードがコーリー嬢に会う前はロンドンで母一人、子一人の生活であった。しかし彼が彼女に初めて会ったさいには、リチャードの母がすでに亡くなっており、彼は一人ぼっちであったので、彼女についてバーミンガム行き、1830年に結婚するさいに、そこで一生暮らすことに決めたようである。

父親の母も彼を生んで二、三か月で亡くなって、姉のケトゥーラは大叔父エドワード・ビヴァンの養子になり、トマス・バーン氏に嫁いだ。エドワードは1834年の元旦に洗礼を受けるさいに、バーン夫妻がエドワードの代理親となってバーミンガムのセント・フィリップ教会で父母と伯母の家系から名をそれぞれもらってエドワード・コーリー・バーン＝ジョーンズと命名された。エドワードの父方の曾祖父はハンベリーで学校の先生をしていたというが、彼の才能を予見させる血筋はいずれの家系にも見あたらない。

父のリチャードは儉約家であったが、商才に長けた方ではなかった。そのために家では一ペニータりともおろそかにされなかった。そして父は妻を急に失った挫折感を仕事に打ち込むことで紛らそうとして自分のこともほとんどかまわないほどであった。彼は朝の四時に起床し、夜中まで床に就かないことも多かったという。リチャードが寝に行ったさいは、息子はすでに部屋の隅の小さなベッドで深い眠りについていて、父親は息子のエドワードにもその当時はあまり接したがらない小心で憂鬱な性格であったし、実際に小さな子供にどう接すればよいのかも分からなかったようである。エドワードが四歳になるまでは、自分の子供の世話をどうすることもできず、乳母に育ててもらったことになった。何人かの乳母が入れ替わり雇われたが長続きはしなかった。亡くなった母親の

友人の努力で、家事と幼児の世話をするのに適したサンプスン嬢がやっと見つかった。しかしエドワードは神経質で、比較的ひ弱であって、陽気な暖かい家庭で養育されることがとりわけ必要なタイプの子であったのに、結局は未婚の彼女がジョーンズ家のきりもりをすることになる。それでエドワードの幼年時代の家庭内には口数の少ない哀しい雰囲気があった。後になってエドワードが成人するまでは、いつも父親は同じ部屋に寝たが、父親の愛想のない姿勢は相変わらずであった。乳母のサンプスンも親切ではあったが、エドワードの生活に笑いをもたらすわけではなかった。彼女はむしろエドワードの健康を気にしすぎる方で、聖書の話に耳を傾けるように強制したきらいがあった。そのためにエドワードはかえって人生の途上で、それから離れてしまったとも考えられる。

エドワード・バーン＝ジョーンズ夫人のジョージアナはジョーンズ家の家庭内の雰囲気についてこのように思い出している。「私の視覚を通して想像力にアピールしたのはどれも貧しいものであった。椅子、カーペット、テーブル、あるいは食堂の家具にしろ、たいして冴えないごく普通のものであった。室内で人の感触がある唯一のものはまるで別世界を覗ける窓のように見えた額縁入りの刺繍作品の何点かであった。それらはある人が興味を持って楽しみながら制作したように思えた一人間のような顔をした立派な鈎鼻のライオン—もう一匹は虎だったと思う。それからどんなものだったかは忘れたけれど、ペンダントを着けた一人の少女が墓で悲しんでいるもっと小さな作品であった。暖炉の前飾りの上には教会の絵、いかめしい柱時計の上には市営墓地のように墓石が林立したヨークシャーのスネイスの教会境内の絵が掛けてあった。サンプスン嬢の話によると、これらは親類のお墓であり、一緒にしてあったのは絵に適当な空間を当てるためであったという。何枚かの古い青磁と東洋の模様を模したウースターの食器セットの一部、それにそれほど醜くなく、記憶している所帯道具は銀きせのきうすと優雅なデザインのクリーム・ジャッグだけであった。

リチャード・ジョーンズ氏自身がいつまで経っても「可愛らしいお前」と呼んでいた妻の思い出に結びつく以外で、彼が好きなものは何もなかった」という。

一家が住んでいたベネツ・ヒル11番はバーミンガム市の中心にあって、交通の多い二つの公道を繋ぐ、長くはないが、広幅の街路であった。坂が急だったので、乗物はそれほど多くは通らなかったが、雑踏はかなりあった。その並びは銀行や事務所が主であったが、11番地だけは例外であった。父の店構えは前面がショールームで赤い絨毯を敷き詰めた静かな部屋に鏡や額縁や、ときにはわずかに絵画も展示してあった。横の入口が居間に通じ、その背後には庭もあり、父は仕事場で仕事をしていることが多かった。彼は彫刻家でも箔置き職人として育てられたわけでもないのに、どうしてその職業に就いたかはっきりしないが、彼の妻の父、ベンジャミン・コーリー氏がどうも彼に定職に就くことを条件に娘との結婚を許したようである。まあ、そのような父の仕事がエドワードに絵を意識させることになったのかも知れない。彼は晩年になって父親のことをこのように回顧している。「(父は)・・・社会的に成功した人とはいえなかったが、非常に詩情豊かでとても優しい心を持っていて、痛ましいくらいであった。彼は自分が入り込んだ世界にまったく不適であった。書物もほんのわずかしがなく、それもみな詩人に関するものであった。私が十二歳の頃だったと憶えているが、彼は自分で作った小詩を私に読んで聞かせてくれたものだ。そして非常に感動的な美しい調子の声で、しかも哀調をこめて信じきった読み方をしてくれた。私はそのように気持がよく分かる読み方を聴いたことがなかった。時が経つにつれて、それさえ父は恥ずかしかった。それに彼は良いことなら誰に関して言われたことでもみな信じたし、結局はこの世離れた信心深い人であった。また田舎の人のように、芸術についてはまったく知らなかったし、芸術がどういうものか、なぜ人が絵を描くのか理解できなかつたようである。しかし大自然に対しては情熱があり、見える時に

は日の出を決して見逃さなかったし、穀物畑を見ながら疲れ果てるほどの道のりを歩き回った」⁽²⁾。

エドワードの若い頃のバーミンガムは、マンチェスターやリーズと対照的にまったく異なっていた市であり、わずかな重工業はあったものの、都市の中心部には社会的、経済的に恵まれない多くの労働者たちが稠密に住んでいるという問題を抱えていた。エドワードの住んでいた場所はきちんとした中産階級の通りであったが、少し離れる所には工業化の時代に当る拡張が始まっていて、イギリスの都市としても随分むさ苦しくなりつつあった。エドワードが辿る人生の小道の一部を決めたのは、これらの都会の諸問題と接触したことによると考えられる。オックスフォードに行ってから彼の生涯の友になったウィリアム・モリスが悪に立ち向かったのとは対照的に、エドワードは自分の空想的内面世界にこもることで幻想を追う力を強化する反応に出たのであった。

エドワードの住んでいたベネツ・ヒル11番地の隣の家はユダヤ系の家長制家族で、バーミンガムに設立した商社の共同経営者、ノイシュタットとバーネットの両氏が二人の姉妹と結婚して、両家族の子供たちと寡婦の母親と未婚の伯母が同じ屋根の下に住んでいた。彼らの子供たちはエドワードとほぼ同じ年齢で、彼の初期の楽しみや友だち付き合いはこれらの家族に負うところが大きかった。そして家族はいつもエドワードを親切に歓迎してくれて、彼の初期の幸福な生活の記憶の一部は壁の向こうの生活であった。彼らはエドワードを「従兄弟」とまで言ってくれた。その家で従兄弟と言われるのは大切にされるということであった。彼らは彼とすべての喜びや楽しみを共にして、聖日やお祭りも彼と必ず一緒に過ごした。ピューリム祭の時などは子供たちと一緒に着飾ったりした。エドワードにはそれがとても楽しみで、その日が来ると、彼は必ず最初のお客さんになったという。

2) “Memorials of Edward Burne-Jones” vol. 1. Georgiana Burne-Jones, Lund Humphries London, 1993. p. 16.

サンプスン嬢についてももう少し触れておこう。彼女はエドワードに熱烈な愛情をささげたのに、悲しいかな、彼の気性へ近づく糸口がわずかしか得られなかったようである。しかし魂の宿るその小さな体は、彼女の腕のなかで先ずは安らかに眠った。しかしこうした初期に母親がいなかった数か月が後のエドワードの有望さにかげりをもたらすことになったのかも知れない。サンプスは養育の責任を最初に任されたさいの自分のいくじなさを話すことがよくあった。エドワードは彼女が嫌いではなかったが、自分と随分異なった性格の両親を子供たちが愛するように、彼は決して彼女を批評はしないが、自分の気持を打ち明けようとはしなかった。彼女は教育を受けてなかったが、気丈で直観に優れていて、エドワードに何が必要かは十分にわきまえていた。エドワードは成長するに従って、彼女を優しく扱ったが、サンプスが心をしっかりと捉えようとする、彼はいつもすり抜けてしまうのであった。

父親のリチャード・ジョーンズ氏は子供というのは非常にデリケートであると最初から意識して、できるだけ息子に田舎の生活をさせねばと思っていたので、夏には新鮮な空気を吸わせる目的で数マイル離れた所に宿泊させる目的で息子のエドワードを決ってサンプスン嬢と一緒に送り出した。これらの村落や農場を毎年訪れるのはエドワードにとってとても楽しいものであったようで、晩年にもよく話に出した。現在はもう市に呑まれてしまったが、まだ非常に若い頃に「ニネヴェ」とかいうバーミンガムの郊外に行ったときのことを彼は思い出している。ニネヴェなどというこの一言が幼児の口から出た背景が誰にも分からないものの、彼自身はそれをいうまでもなく「聖書にあるニネヴェ」だと思っていた。サンプスン嬢もそれがバーミンガムの彼の玄関口から三、四マイルの所にあるという事実を明らかにすることはできなかった。しかし彼女には風変りな友人があったとエドワードはいう。外出したさいも、彼女は誠実さから子供の手を離すようなことはなかった。彼が憶えているのは、衣服商を営んでいた人の所へ

彼女と一緒にお使いに行った時のことであった。「サンプスンさんは、私や父の服を仕立ててもらうためによくそこへ生地を買いに行ったものだが、私たちは奇妙に時代遅れで注意深い様式の生活をしてきたものだ。そのおじさんときたら、きゃはんに、やや古ぼけた山の低い帽子を被って、勿論、眼鏡を掛けていた。しばらくして彼は商店を閉じてしまった—私は何故か憶えてないが—年老いてだんだんちじこまっていたみたいだ。彼の家で売るくらいの生地がまだ残っていた間は、サンプスンさんと私はよくそこへ行って生地を買ったものだよ」³⁾。

彼女はそこの友人たちと絶えずお喋りをした。エドワードが決して忘れられないのは、「<エルサレム>という小都市の模型を石で作っているんだ」と言ったら、その相手の誰かがそれは罰あたりなことであって「エドワード、<エルサレム>と呼ぶではない」と叱られて、深く肝に銘じたのであった。彼は次第に内向的な少年になって行ったようで、サンプスは彼の寡黙さによく当惑したものである。それで彼女は突然に「エドワード、何を考えているの」と聞くことがよくあった。その要求に彼はすかさず一言、「らくだだよ」という答えを考え出した。確かにエドワードは初期の頃から自分の内面的才覚に依存することを学んだ想像豊かな子供で、自分独自の世界を創造し、その周辺に楽しみを熱烈に集中させていった。最初それはらくだやその他のグロテスクか、おどけた格好の生き物たちで、いかにも子供らしい空想の世界であったが、それがロマンチックな詩情に成長して行くのである。父親の好きなシェイクスピアやバイロン、スコットなどの本は書棚にあったが、それ以外の本はほとんどなかった。しかし父親はそれらの書物を少年の彼に朗読してやるのが好きだった。それから得られた知識その他からエドワードは早くから『トロイア物語』や『金の羊毛』、あるいは『オデュッセイア』の波乱万丈の旅行記の古典神話に詳しくなったことは確かである。これらの

3) op. cit., p. 5.

物語は幼い彼に強烈にアッピールして、終生の教養の一部になった。

彼の子供時代を楽しくしてくれたのは、父親の友人であるカズウェル夫妻であった。彼らには子供がなく、エドワードが好きで、才能もあると思っていたので、時々彼らの家に彼を招くことがあった。初対面のさいにカズウェル夫人はすでに白髪まじりの小柄な老婆で、彼を風呂に入れるのが、まるで両親であるかのように楽しくてたまらなかつたようである。エドワードはよく彼女の手を擦り抜けて風呂桶の外に出て笑い声を上げて部屋をぐるぐる回った。一緒に「ジム・クロウ(黒んぼう)」を歌って踊ったり、三人でゲームをしたり、彼女の夫も戯れに加わってエドワードの仕草を残らず褒めた。そして「母のない子と子供のない母／一緒に、互に好き好き」と歌った。

少し後にカズウェル氏はエドワードの絵に注目し、彫版を手本に与えて最初に本気で絵の指導をした。エドワードが七歳の時に描いたその模写の一枚が今でも残っている。その主題は鹿の群れで、カズウェル氏の評が直接に書いてある。その言葉が絵のなかの空を横切るのを見て子供ながらの怒りを感じたようで、そのことをバーン＝ジョーンズは生涯話し続けたからには決して忘れられないことであつたに違いない。カズウェル自身は仕事を引退して、売りに出されたほどほどの大きさの絵を買い、彼の空想の赴くままにそれらを修正するのを大変に喜んでいたが、エドワードはブラダグー(小さな袋)から絵の具がしぼり出されるのを見るのが面白くてたまらなかつたという。

それからバーミンガムからやや離れた所に住んでいたカズウェル夫妻には、庭いじりの至福があつた。夫人と一緒に花の香を嗅いだり、すぐりの実やグズベリーの身を摘みに出かけ、それらを彼女が美味しいパイにしたのを味わつた。エドワードは亡くなる数年前のある夕べ、晚餐テーブルの中央からおいあらせとうの花を取って、香を嗅いで「私はカズウェル夫妻の庭でまた四歳になつた。カズウェル夫妻はなんて私に優しくかつたのだろう。今でもそれを思い出した」と言つたことが

ある。

彼が四歳か五歳の頃、エドワードの母親の妹の一人「アメリカ」は当時ウォリックシャーのウートンという奥深い田舎の農夫であつたチョイス氏の三番目の妻になつた。間もなくして彼女は優しい心使いから、この小都市の青白い甥に会いに来るよう招待した。それが度々の訪問の最初であつた。チョイス氏には先妻の義理の従兄弟になる子供たちがいた。エドワードにとってはいつも一人っ子の家と都会の街路から、家庭生活の真っ只中に、また野原の自由な農場で働く楽しい騒音のなかに突入する変化が、喜びのショックであつたに違いない。そのウートンでの暮しのことを、まるで日を追って思い出すかのように彼は度々話したものである。若者のなかで一番年上にマリアという利発な少女がいたし、彼女の妹のキティは年頃で美しく愛敬があり、二人は彼に大きな影響を与えた。エドワードは少年であつたので、下の子より年上の姉の方に同行するのが常であつたが、二人を特別な友だちを選ぶことになつた。その一人が「彼が最初にウートンに来た時はまだ六歳にもなつていなかったもので、小さな男の子なのに絵を描こうとしていて随分お利口な子供だと思ひました」と述べている。彼はそれぞれの特徴をよく描き分けたものである。しかし若い女性たちが装う巻髪はまぎれもなく描いたものの、女中が被つていた帽子には、いわゆる「頭でっかち」になつてしまつて手こずつたようである。

彼の描くことの初期の習慣について友人が書き残した言葉がある。エドワードにデヴィッド・コッパーフィールドみたいに疎んじられた子供時代だと話したら、彼はついでに、自分は一人ぼっちでも不幸に感じた憶えは決してないと言つた。

「まあ、描くことだつてあるだろう。私だつて同じさ。私はいつも描いていたもんだ。母を亡くし、兄弟も姉妹もなく、打ちしおれた父はいたけれど、私はいつも一人だつた。私はいつも描いていたから、決して不幸でなんかなかつた。その頃の私にとっての絵の心は何であつたかと考えると、描いているとほとんど動揺しないのでよかつたので

素晴らしかったというところだろう。私は人々を描けなかったが、山などは見たことがなくても、今と変わらないくらいに必ずどの背景にもちゃんと描いたものだ」。

彼の描画には治療的効果があったといっても良いであろう。彼の日常の不安は眠れない夜や悪夢へ発展していった。チャーティスト運動の騒乱があった1839年に、父親が治安判事の任命による臨時巡査の宣誓就任に行ったさいの深い印象が彼には残っている。父親の留守の間に乳母が彼を寝かせつけるさいに、街路で実際に起こっていることや起こりそうなことの恐ろしい話をしたので、エドワードの恐怖が煽られ、彼は多くの事柄の想像に悩まされた。彼は子供時代に悪夢で眠れない夜が多く、目を覚まして泣くことも多かったが、その暗い中に彼の父親やサンプスン嬢が「随分と不安そうな顔をして」ベッドの脇に立って自分を見つめているのに気付いて恐怖を新たにすることも多かった。それで突然に目が覚めて、びっくりしたら困るから、子供が眠っている時に立って見つめないで、と二人の注意を促した。後に彼は夜と同じように昼も夢見る夢想家の生涯を過ごすことになる。

この不適応による緊張感をほぐすのに彼のこの鮮明な想像力によって発見したものを描くことが役だった。これがバーン＝ジョーンズの芸術がもたらす結果的な役割であり特徴でもあり、彼の生涯において独自の自叙伝的性格や情熱的な係わり合いにそれが果たした役割をうかがうことができる。

マリア・チョイス嬢は彼より十歳くらいは年上だったが、姉のようにとても親切であったので、二、三年後に彼は彼女だけに自分の気持をそれとなく打ち明けたようであった。しかしそれ以前に、彼にとっては体の健康づくりの方が先であった。注意深い父親は陸地の空気が満足でないと思っていたようで、彼はランカシアシャー沿岸のブラックプールという海浜へ送り出された。そこへは隣のノイシュタットとバーネット家の子供たちが多分行っていたからであろう。そこに滞在する間は従って喜びいさんだ子供の一団が一軒の家に宿泊



図1 「私はいつも一人だった。私は描いていたから、不幸でなんかなかった。・・・山など見たことがなくても・・・ちゃんと描いた」というバーン＝ジョーンズの幼い頃の絵。

することになった。サンプスン嬢がそれらの友だちと愛想よくすることから、ユダヤ教の安息日(土曜)もキリスト教(日曜)のと同様にエドワードは守らされて、その儀式が退屈でたまらなかったとよく述べたものである。しかしどの子も確かにそ

の処置を和らげることを心得ていた。彼はまた Sampson の作法の滑稽な誇張についても苦情をもらした。子供の教育ということで彼女は、卓上に果物が出されていたら「好きなのを貰ってもよいけど、一つだけよ」などと礼儀や規則などについて喧しかった。この新奇な規則のもとでもエドワードがすぐりの実ばかり選んで、Sampson 嬢は「一つだけよ」を何回も連発したことは確かである。

1873年に遙か昔の記憶について彼が友だちに書いていることは、まだ四歳の時に見たバーミンガム市主催の1838年6月28日のヴィクトリア女王の戴冠式を祝う仮装行列であった。「・・・を見に行ったら、貧しい人々もみな御馳走にあずかり、皆の喜びの声や鐘の鳴る音が空に響き渡っていた・・・家の前で旗を振ることが許され、それがまた私にこれまでにない喜びを与えてくれたと思う」⁴⁾。

エドワードが父親とだけ出歩く年に生長したさいに、父と一緒に母の命日にお墓を訪れたものだが、父が彼の手をしっかりと握りすぎて、怖くなって泣いてしまったという。そのことがあって六十年後のこと「9月は3日の日曜日であった。いつもその日になると敬虔な気持でいるようにしたのは、私が生れて六日目の一私の母が死んだ日であった」と述べている。彼の母親を個人的に知っている人は、彼女の際だった特徴が「並みでない実際的な良識家」であったというし、叔母が「彼女は非常に可愛く、詩の朗読がうまい、綺麗な人だった」と書いている。エドワードの父や彼の家系は皆、肌の色が浅黒いのに、子供の髪が白みがかかった金髪で、目の色も明るい色だから、彼女は色白であったに違いない。

エドワードはいつ頃から読み書きを覚えたのか記録は残っていない。Sampson 嬢が教えた可能性もある。しかし彼が父宛に書いた手紙から、彼は九歳になる前にすでにすらすら文が書けたし、読書が好きであったことは明白である。この初期の手書きでもペン使いが喜びを表して明瞭で丁寧

であり、自分のサインには飾り書きまでしてある。さらに飾りを付けるさいは二羽の鳥を加えた。1842年6月20日付きのブラックプールからの手紙はこう始まっている。

「愛するパパへ。パパがブラックプールに来て会えたらとても嬉しいです。僕はこの町が非常に好きです。だけど白や赤い家の方が多いので、ブラックプールなんて呼ばない方がよいと思います」。別の手紙では「僕が良い子にしていたら、Sampson さんが明日驢馬乗りに行くと言っています」。次に出した手紙の日付の上に Sampson 嬢はハーミティジというその場所の名前にちなんで「こちらはまるで隠者の庵みたいです」と書いてあった。そのことについてエドワードはこのように書いている。

「ブラックプール、6月23日

愛するパパへ

僕は叔父さんの望みの絵を今描き終わったところです。彼が気に入るといいんだがな。昨日僕は驢馬に乗って、とても良かった。だけど帰る途中で男の子が驢馬の脚に紐を巻きつけてしまって、Sampson さんが振り落とされて、頭痛になったのに、彼は立ち去ってしまいました。パパは Sampson さんの手紙の一番上のところにハーミティジ(隠者の庵より)と書いてあったというけど、とても沢山の友だちに来てもらえるので、僕は隠者のような生活はしていないと思う。『イソップ物語』を送ってくれたらな、と願っているけど、無理だろうね。僕は随分色々な美しい石を集めたけれど、貝殻はあまり綺麗ではありません」⁵⁾。

「6月24日。今日の昼前に僕は三回も水浴をしたけど、水浴は好きでたまりません。以前の二倍は楽しみました。僕はとても本が欲しいのです。パパからの手紙を毎日待っています。とても長い手紙を出して下さい。僕たちは皆とても気持良く過

4) op. cit., p. 9.

5) op. cit., p. 11.

ごしています。僕はとても元気で、丈夫になったかも知れません。僕は隣りの子供たちに手紙を書いてないので、ごめんなさい、と思っています、どうか伝えて下さい。僕は砂浜や野原を走り回っていて、とても暇がないのです」。

「追伸、おじいちゃんやカズウェルさんにもどうかよろしく伝えて下さい」⁶⁾。

父親を満足させるサンプスン嬢の追伸もあった。「エドワードとお会いになれば喜びなさるでしょう。彼は非常に健康そうで、日増しに強くなっています」。この手紙にある叔父さんというのは母親の片親兄弟のサミュエル・ペリー氏で、彼はエドワードにいつも親切であった。

1843年にはチョイス家がウートンから、別の家系の家族が借用していたリースターシャーのハリス・ブリッジという農場に移った。エドワードはそこへも毎年訪れた。そして彼は胸が虚弱ではあったが、夏には他の少年と同じような野外生活を行ない、「充実した喜びや気力」を養ったことを思い出している。彼がまだかなり小さい時の主な遊び友だちは彼よりわずかに年下の従姉妹であった。それは彼にとって男の子のゲームが荒っぽすぎると考えられていたからであるが、後にはクリケットや水泳にも参加した。彼らが水浴びしたのはセンスという名の川で、少し年上の少女たちは彼らが水中にいる間に水を、しかも沢山飲むように叱咤して戯れたりした。ハリス・ブリッジから父親宛の日付なしの手紙には、その書き方から判断するとブラックプールのものから三、四年後のものようで、そのなかで彼は郵便のためにトワイクロス(3マイル)の往復を歩いたり「土曜の夜には日曜日まで徹夜」したので、健康のことはもう特別に注意しなくて大丈夫、と述べている。これらは田舎や休みの生活だけで、家でどのように勉強したのか、またグラマー・スクール(公立中学校)に入学するためにバーミンガムの予備課程の学校に行ったのかどうかの記録は見つからない。

バーミンガムのキング・エドワード校はチャー

ルズ・バリーによって1834年に再建されたが、後に非常に良く似た建物が国会議事堂に用いられた。学校は古典と英語(すなわち親しみをもって「商業」と呼ばれた)の二部に分割されていた。父親のジョーンズ氏が息子をこの後者に入学させた当時はエドワードに商売が適するような教育を与えようとした考えがあったことを物語っている。通常こちら側の授業に出る生徒は十六歳で学校を卒業した。ラテン語は両部で教えられたが、ギリシア語は古典部だけであった。この国では寄付が豊富であったので、書物の費用を除外すると教育は無料であった。この頃には全部で450人ほどの学生がいて、根本的には昼間の授業であったが、教師や助教師がそれぞれ自宅で20人ばかりの下宿学生を抱えていた。古典部は英語部よりわずかに人数が多かった。全体の授業がその建物の二階の天井の高い、敷石床の二つの大部屋で行なわれ、個々別々の教室はなかった。そして英語部の方では低学年の授業はあまりにも人数が多くて教師二人が生徒たちを適切に指導するのはどうしても不可能であった。「バベルの都はひどい。教えるのではなく、叫んでいるので肺臓には多分良いかも知れないがね」と上級生が言っていた。騒々しさは外の交通量で増加する一方であった。座って授業について行くことなどできず、下級生などは疲れ果て、時間が終了する前にぐったりして注意がかなり困難な状態にあった。8時30分から12時まで、それから2時から5時までは休みもなかった。厳格な校風で知られていたが、体罰や弱い者いじめは当たり前で、棒でこずかれることも多かったという。「例外的な大志と理解力のある生徒だけが進歩したもので、生徒たちは自分には難しすぎると夢にも了解を求めてはならなかった。それほど混雑しない高学年に達するまでは、体罰用の鞭の存分な使用で、やっと先に進められたのである」。現在のように教育技術は研究されていなかったため、エドワード自身の言葉がその状態を証言してくれる。

「授業で私たちは一言の説明もなしに、シーザーに突入させられた。歴史で私たちが学んでいる戦記物がその人の日誌であり、ローマの元老院に書

6) op. cit. , p. 12.

簡の形式で書かれていること、またそれについてのほんの少しの事柄さえも先生は教えてくれなかった。そして最初から始められるのではなく、ローマ人は橋梁構築が素晴らしかったということで橋梁構築の技術のど真ん中から教えられた。それもラテン語で商業を学ぶのと同じくらいに大事だといわれた。私はこの新しい環境でも言うまでもなく一人立ちできたが、少し鈍い生徒はどうしようもなかった⁷⁾。

これらの欠陥はあったものの、キング・エドワード校は、1845年から1848年の四年内で古典部の上級の四人をケンブリッジ大学へ進学させられた実績によって、どこにも劣らない学業で有名になった。再建後の最初の校長は後にオックスフォードのペムブルック・カレッジの教授とピーターバラの主教になったジューン博士であった。彼を1838年に継承したのはプリンス・リー（後のマンチェスターの主教）であったが、彼らの共同研究が成果を見せたのがこの時期の最後の数年であった。エドワードが実際的に入学したのはプリンス・リーの時期であったが、彼が古典部に合格した一年前の1847年に校長がバーミングラムを後にしたので、個人的な接触はほとんどなかった。英語部の方に彼がまだいる間に、ウェストコット、ライトフット、ベンスンの三人の際だった学生が卒業してケンブリッジへ行った。

ベネツ・ヒルは学校から二、三ヤードしかない所にあつたので、通学して運動になる距離ではなかったし、当時は大掛かりな競技がお膳立てされることもなかった。すこし離れた所の競技場が下宿生に貸し与えられていて、彼らが上級生を競技に参加するように招待することがときどきあった。しかしエドワードはそれに一度も参加しなかったし、散歩もたいして好きでなかったようで、彼の学期間の楽しみは主に室内で見出しがちであった。しかし休暇期間にはハリス・ブリッジでの野外生活を楽しんだし「隣の子供たち」との親密さは変わらなかった。家庭では実際的な勉強の援

助が得られなかったものの、父親は勉強が重要とみなしていた。それで書物をいつも「片づける」必要のある面倒がなくて、彼だけの世界が築ける勉強部屋が与えられていた。その家庭内の雰囲気は彼独自の勉強に役だった。また彼は、世間では男の子のためになる現実的な処世術とされた荒っぽい扱いを父親から受けたことがまったくなかった。

しかし別の時には子供時代について彼は、小説は読んで欲しくないという父親の希望があつたので、それに従つたと友だちに話したことがある。差し控えたどの本よりも豊富な知恵の倉である『イソップ物語』は最初から所有していた。それがいかに彼に大切であつたかは父親宛の手紙ですでに紹介したところである。『天路歷程 Pilgrim's Progress』も読んでいたが、その天才的作品が発散させる空気の不思議な力でその詩情は彼に届き、それなりの印象を与えたようである。というのも、ビューラ（おかま）の国の大物を表す彼の絵があるからである。学校での最初の三、四年間にはとりわけ特別な友だちもできずに過ごしたように思えたが、その活発な交際のなかで次第に選べる仲好しができ、ついに大切な友だちになったのがコーメル・プラスであり、彼は後にヘイリベリのモダン・スクールの教師とウェストワード・ホーにあるユナイテッド・サーヴィシイズ・カレッジの校長を二十年も勤めた。「しばらくの間二人は見かけたり、名前を耳にする程度の付き合いであつた。それに、エドワードの特徴ある笑い声も加えられるであろう」というのが学校生活について聞かれたときのバーン＝ジョーンズに関するプライス氏の即座の答えであつた。「ともかく先ず最初にそれを思い出した。エドワードが学校から放課後に出て来るのが笑い声で分かつた。そして彼は学校の広い正面玄関から飛び出すや否やふざけ出すのであつた」。時間が経つと彼らは互に親密になった。そのために彼の両親とも知り合になり、友情も深まっていき、コーメルの姉妹たちもエドワードを兄弟のように迎えてくれた。

エドワードが1844年9月にキング・エドワード

7) op. cit., p. 15.

校に入ったさいは最低のクラスであったが、次の半年の末には二級特進し、そこに十八か月いて最後の半学期は「ぼろぼろ」校舎の英語部で勉強した。彼はこれらの間に必須はいうまでもないが、自分の意思でも勉強した。そこで彼は与えられた知的なはけ口に集中したのである。書物こそが絶えず彼が入ろうとした新しい世界の門となり、彼の想像力は散文と詩によって歴史とロマン(物語)を大いに認識することで占められた。コーメル・プライスと彼は、容易に近づける距離にあって、しかも静かで樹木の多い唯一の公的広場であったイクニールド街の古いバーミンガム墓地で、二人は天気の良い休日の多くの午後を好きな書物に没頭して過ごした。そこで少年たちは読書したり、詩を朗読したり、話をしたりしたのである。その中にはスコットランドのロマン派の詩人で、秋や黄昏のやるせなさや懐旧の情を好んで歌ったり、三世紀頃のアイルランドの伝説的英雄詩を英訳したマクファースン著『オッシアン Ossian』があったが、それをプライスは英雄文学の彼らの共有備品として寄付した。歩きながら彼らはそれを声に出して反復し、彼らが持っていたバラッドの翻訳本の、ビュルガー著・テイラー訳『レオノール Leonore』の素晴らしい詩行を初期には交互に朗読し合って飽きることを知らなかった。

しかしエドワードは勉強や仕事の合間にまるで食べ物と空気のように「戯れ」の必要を生涯通じて感じていた。彼を知っている人が誰でも彼らしいと気付く特徴を説明するにはこのような言葉がぴったりするであろう。温和だが時には軽妙なところもあり、他の時には熱狂じみて騒がしく、風変りな言葉使いをし、静かな時は不気味で思いついた小悪魔のような悪戯の計略を即座に実行するが、いつも大笑いになるというものである。またケルト族の血を引く「喜びや楽しみ、憧れ、欲望、調べや歌」を意味する直観的な「面白さ」と「憂鬱さ」が彼の資質に負担をかけ過ぎたのであろう。人を困らせる悪ふざけさえ彼は愛好し、大胆にそれを弁護した。少年時代に遊んだことの記憶にも、彼がそれらを思い出して決して飽きずに話す時は

まるで、聞く人さえ一緒になって遊んだかのように感じさせられてしまう。その一つを紹介すると、彼の家の屋上階に出窓があり、その後ろに自分の身体を隠して頭だけを出して下を見るスペースがあった。その物見台から見た警官についての話は、まるで昨日あったかのように感じる。立派な警官が乗馬して、家の反対側に馬を止め、身軽に馬から降りて立ち去った後に美しい新品の鞍が彼の悪戯な目にとまったのである。愛用の水鉄砲に急いで水を入れて悪戯した。その中身の水が明るい茶色の皮に全部散布された。その後に警官が再び現れると、鞍が濡れているのに気付いて急に何かを調べる必要に迫られた。彼は先ず空を見上げ、下の舗装を見降ろし、雨がまだ降っているのか確かめようと、何と手まで出してみたのである！バーミンガムの時雨は非常に地区的なので、濡れない内にと警官は急いで乗馬して去ったのである。飽きもせずよく出てくる別の話は、街路で彼が悪戯した後に警官の手が急に彼の肩にかけられた運命の日であった。彼はついに最後の時がきたと感じ、とっさにその手がしっかりと掴まない内にするりと下にぬけて、一目散に逃げ出し、警官が追いかけてきたら、立止まりもせずにもものすごい勢いで父親の部屋の扉を通り抜けたというのである。

彼が書いた手紙には軽い素描があることがよくあり、小悪魔がクリケットをしているのを描いたのが残っている。後に彼は学校でも悪魔を描くことで特別な評判を獲得した。黒の小さなシルエットであるが、かれらほどははっきりと彼の芸術の前兆を示しているものはないように思える。内的な衝動によって彼は自分の思っているものを表そうという気持ちに駆られたが、自分が描いた優劣を測る基準を持ち合せていなかった。彼にはユーモアのセンスがあり、学校の先生たちをいいカモ(餌食)にしたカリカチュア(風刺画)の才能もあった

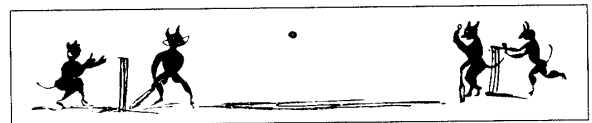


図2 小学生時代に人気があった小悪魔がクリケットをしているバーン＝ジョーンズの絵。

ので、予想外に他の生徒たちに人気があった。

1848年の秋にはコーメル・プライスがいつも連れ立つ彼の友人になり、計画も彼と一緒にものが多くなった。先ず最初の計画は「学生用の普遍的な歴史書」であった。その序を書くのにエドワードは四、五か月はかかったが、その全部をエドワードが書いた。これが完了したら「もっとスピーディに書き上げるために、互に別々に進めることにしたが、エドワードは古代エジプトを選び、私は第三王国をやってみることにした。彼はノアの洪水からカンピュセス(?-BC522)までの時代を書くのにまったくわずかな週しか必要でなかったが、その間に私はリディア(小アジア西部の古代王国)からビシニア(小アジア北西部の古代王国)に関する一頁で奮闘している始末であった」とプライスが述べている。その時に書き込んだ歴史年表は現在もう実在しない。しかしこの世界史に関する編纂計画が彼ら二人にとっていかに壮大でも、現実離れた計画に違いないことは容易に想像できる。

その一方で彼は、夕方に地元のデザイン学校の美術教室に週三回通いだした。その時の手作りの帳面には光と影の原理に関する教授内容と、原色と二次色、三次色を塗ったダイアグラムと練習問題をていねいに書いている。またエドワードが十四、五歳の頃にビデフォードの学校で非常に変わった先生に習ったことがある。彼の名前はアブラハム・ケル・トムスンであったが、皆はトムスンと呼んでいたのが残念であった。アブラハムの方がずっと良いと彼は思っていたのである。先生は出席をとり、前にいた生徒にどれでも良いから本を開くように言って、偶然に開けた箇所をその生徒に読ませ、そこに書いてあるすべての単語の語源や意味の変遷について述べだすのであった。まったくつまらない文章であれば、彼は太平洋の海水やバビロンの沼地、コーカサスの丘、ダッタン(東欧からアジアに渡る地方)、あるいは星座や空間の無限さに生徒たちを連れて行った。このようにして教えてくれた人はかつてなかった。その学校を卒業する前の1848年末にエドワードが大学に進学する見込で学校の古典部に移るように取り計って

くれたのもこのトムスン先生の行きとどいた世話に大いに依存している。

別の友人のカノン・ディクスンはバーン＝ジョーンズの中学生時代の容貌をこのように言っている。「私がバーン＝ジョーンズを最初に見たのは彼が商業部から古典部へ移ってきた時であった。その頃の彼は十五歳くらいであった。背が高く強そうで、その学級の彼よりは年下の生徒のなかで背筋を伸ばして自信ありげにきちんと机に座っていた姿に注目したことを憶えている。彼がなかでも冗談好きで、笑わせの特技をもった人気者であることが私にはただちに分かったが、その笑いのなかには、お人好しや娯楽がほどよく交えられた軽蔑があった。私がすぐに気付いたのは、その後もそれを聞くことがいかに多かったかということである」。

最初エドワードが彼より全般的に下の能力の生徒たちのいる学級に入れられたのは、ギリシア語の教科を学んでなかったからである。しかしこれが彼にとって不利であったとはいえない。それがかえって彼の準備期間に余暇を与えることになり、歴史書を読むことにそれを当てがい「見識の見当をつける」ことになったからである。すでにかなりな量のラテン語を修得して、語学の手順を心得ていた生徒であった彼にとって、その必修ギリシア語は容易すぎるほどであった。だから学校での彼の学習は何なく着実に進められた。

しかし学校で習った素描の授業は彼に役立たないようであった。その先生が無能であったということではないが、卒業生の記憶によると、先生は自分の仕事に夢中になっていて生徒のことを忘れていたようであり、高い演壇から生徒がやったことを見に一時間に一度以上降りてくることがほとんどなかったという。この自然な結果として、生徒の「机下の(内職による)」読書が大ぴらに続行され、階下の教室で行なわれた素描の授業へは本を持って行くのが当たり前の習慣になっていた。学期全体のその授業が終わるまでにバーン＝ジョーンズが素描で褒められたのは一回だけであった。彼がバビロニアやニネヴェ、ペルシア、エジプト

などに最初に熱心になり、ギリシアやローマに感動する以前にそれらを彼が確かに意識していたのはトムスン先生の影響であり、彼の授業が広範にめぐり巡った説明になったからであろう。それほどに才能のない先生に習えばギリシアやローマが学校の授業で駄目にされることも大いにあり得ることであったに違いなく、ともかく彼が近代に近い世界を自分で切り開くのは多くの生徒と同じようになりかなり後になってからであった。

この頃のバーミンガム市の街路の外観についての同郷人の記憶は悲しいものであった。彼は「街全体に油と煙と汗と酔っ払いの悪臭がただよっていた」と書いている。現在のバーミンガムを知っている世代の人には信じられなくても事実であったように考えられる。バーン＝ジョーンズに勉強部屋として当てがわれていたのは、家の最上階にあるさえない部屋で、冬も非常に寒かったが、エドワードとコーメル・プライスは自分たちが創造したそこの楽しい時間を何時間も過ごし、彼ら自身がそうした環境に適応して、ずっと暖かく明るい客間に降りてくることはほとんどなかったという。プライスは「ぎっしりと詰まった本棚と、特別な本から参考事項を書き抜きしに立ち上がるのが誇りに思えた蔵書の記憶がある」と述べている。バーン＝ジョーンズは確かに学校生活の間にもかなりの叢書を集めていた。贈呈された書物もあったが、しっかりした目的で小使い銭を周到に節約して自分で購入した本が遥かに多かった。

年が二歳も違うこの年代の少年二人が非常に満足して一緒に過ごし、親密な友情を保つのは不可能に思えるであろう。だがそれに反して、十五歳と十三歳の少年が勉強と娯楽の両方で共通の場を見出したのである。その部屋についてコーメルが二人で「博物館」を造ったと妹に語ったところを見ると、やはりコーメルの幼さがはつきりする。「エドワードの家には大した博物館があるんだ。化石やコイン、鉱石、貝殻その他の珍しいものがあるし、そのなかには三つのとても貴重な化石もあるんだ。僕たちの貝殻は素晴らしいが、パパがほら、憶えてるだろう、あの二つの大きなほら貝

を寄付する見込もあるんだ。コインも相当なものだ・・・珍しい遺物は木の繊維で作った紙や、トラファルガーの記念すべき戦いで水兵が首に着けていた石、それにリチャード三世が殺された場所のボズワース・フィールドに建てられた石のかけらなどもあるんだぞ。鉱石だって沢山あるんだ。たった二人のメンバーしかいないが、要するに重要財産なのさ」。

エドワードが新しい環境で結ぶ友情のなかでも最初の友人との感情が変わるわけではなかった。リチャード・ワットソン・ディクソン、それからエドワードより年上でケンブリッジに行こうとしていたウィルフレッド・ヒーリーなども連絡は密にして、後に彼と一緒に「オックスフォードの仲間」になった。それからウィリアム・フルフォードは仲間の誰よりも年長で、キング・エドワード校時代では主としてヒーリーの友人であった。フォークナーもその仲間の重要なメンバーだったが、彼はバーミンガムの職業学校で教育を受けていたので、大学へ行って初めて知合った友人である。

この時期のエドワードは学校で暇があれば自分の楽しみや周囲の人々を楽しませるためにいつも絵を描いていた。級友は「人物であろうと、グループであろうとノートを書くように次々にすらすらと、まるで彼の目の前にそれらの人々を見ているかのようにフルスキャップ判の紙(17×131/2インチ)を埋めて行った」と述べている。この癖は生涯続いたので、多量の紙をまるで息するように容易に素描で埋めつくしたに違いない。どの友だちの家にもその何枚かは残っていた。それはまた待合いや話をしないとき、あるいは不快な時間をつぶすためでもあったが、寄ってきて見た人は皆その創造の速さにびっくりし、ついに限りない笑いに発展するのであった。多くはまだ「小悪魔たち」であったが、群衆には大受けした。

次第に彼自身も他も、当然の行き着くところとして教会のことを考慮しなければならない年になったが、彼のユーモア感覚から免れられるものは何もなかった。だから牧師だってカリカチュアの

餌食になった。彼が何度も繰り返し描いた聖職者の像には真面目なものもあり、一例を上げるとそれは職服を着て祭壇の前に立っている若い司祭であった。その絵の一枚をみせられたディクソンは「いつの日かその服装になるのが私の希望だ」と言った。

バーン＝ジョーンズが高教会運動にどのようにして引きつけられたかを定めるのは不可能である。当時の福音派の礼拝の見えすいた醜さが否定できない要因であろう。父親のジョーンズ氏はセント・メアリー教会に家族席を持っていた。その教会を持っていた牧師のJ. ケースボウ・バレット師は市の福音派の指導的な人物であってエドワードに「恐らくその志向がなかつと思われが」大いに消し難い印象を与えたので、彼の友人たちはその師とみな知り合にならねばならなかった。バレット師は芝居がかった弁舌で天国における極楽と地獄における苦痛を熱狂的に語ったので、会衆のメンバーたちからたいした雄弁家だと言われていた。しかしエドワードは特に師のスタイルの豪華さにこだわっていたに過ぎなかった。

よく考える間にこれらのことが次第に彼には嫌になっていったが、その折りに生れて初めて旧式の教会とその美しい礼拝に接する機会があった。それは修復で聖堂がまだ損われていないヘリフォードにおいてであった。カズウェル夫人の兄弟になるスポッツィ氏が奥さんと共にエドワードに絶大な優しさと愛情を示してくれたのであった。遙かオックスフォードの日々にいたるまで彼は休暇中によくそこに滞在した。その環境にいると他のどこよりも多分楽しかったのであろう。彼らが住んでいた家が満足する礼拝の行われる聖堂の近くにあった。彼は賢く、心暖まる陽気な付き合いが好きで、夫妻の友人たちも好きで賞賛したい人たちが見つかった。その一人がその時はまだ聖職に就いたばかりで、その後ヘリフォードの聖歌助手と聖堂準参事会員の管理者になったジョン・ゴズ師であった。聖歌助手というのは礼拝の時に歌詞の一部を歌う牧師であった。彼は素らしいテナーの声と社会的にも非常に人気のある魅力的な性

格の持主であった。もっとも高教会の見解を持っているのは彼以外にほとんどいなかった。この見解にバーン＝ジョーンズは引きつけられ、ゴズ師もまた彼の配慮に応じてくれた。ゴズ師は福音派教会からの分離運動の主要な人物であったニューマン枢機卿の内省期間にオックスフォードへ来ていたのである。エドワードがニューマンの著述に誘われ、また彼が後に大学を選ぶのもこのゴズ師の影響と考えられる。というのも、師自身がエクセター・カレッジの出身であり、青年の彼にその名列に名をつらねるように助言したからであった。

スポッツィ氏のもう一人の友人のタウンゼンド・スミス氏はすでに聖堂のオルガン奏者として有名で、ヘリフォードのトリエンナール(三年毎のお祭り)には指揮者も務めた人物で、やはり彼の人生に新しさを吹き込んだ。スポッツィ夫妻は音楽家族で、奥さんは歌を唄い、チェロ奏者でもあったので、家では良い音楽が聞こえることが多かった。彼らが心の広い人々であることは、歌うのが非常に好きであり、彼らと食事を共にすることも多かったヘリフォードのカトリック教会の教区司祭も含めた友好的な仲間の輪によって証明される。スポッツィ氏はデヴィッド・コックストという画家に貰ったスケッチをもっていて、彼がいささか自慢げに言ったのは、ロムニーというイギリスの画家(1734-1802)でその主題は「リア王とコーディリア姫」であった。

バーン＝ジョーンズにとって、この大聖堂のある都市からバーミンガムへ戻ったさいのこれらの日々の対照は非常に大きかったに違いなく、その結果の一例は彼が恐らく十六歳の頃であったようであるが、父親がセント・メアリー教会とバレット師から離れて、礼拝や教義が「高尚」であったセント・ポール教会へ移ったことがあげられよう。そのために彼の父親が「家族席」を取り払い、他へ移転させた影響がいかに大きかったかは明らかである。

その後は彼の心のなかで教会の事柄が急速に重要性を増していった、彼はバーミンガムで彼と同じ見解をもっている人と友だちになりだした。セ

ント・ポール教会に出席していたなかでもコンプトン夫人と彼女の娘たちの彼への共鳴が救いとなって、彼を楽しませた。コンプトン夫人はジョーンズ氏へ息子を大学へやるべきと説得するのに熱心であったようで、多分バーン＝ジョーンズが聖職に就く志向を強めたことでも彼らの影響が大きかったであろう。このような教会に関する反動的な心の迷いが彼にあったにもかかわらず、ロンドンではウォルワース・ロードのベレズフォード礼拝堂の福音派の礼拝へは叔母についていつも行った。不思議なことに、エドワードに未知の英雄であったジョン・ラスキンが彼の生れる前にそこへ両親に連れられて来たことがあった。エドワードは1858年になってそのことが四巻目の過去帳に記載されているのが分かったので、彼はその友人との影のようなきずなを急いで主張したという。

「実のところ私は、数週間前に細部まで精密なイラストレーションを描き込んだ手紙を書いたのです。ところがそれが完全に出来上がって見ますと、非常に醜いので私はこなごなに破ってしまいました—それはベレズフォードの礼拝堂の記念にと、その礼拝の外観を描いたものです。私はお祈りするさいに牧師が厚ぼったいクッションに顔を埋めていたのを憶えていたので、私の素描で笑ってただこうと描きました。どうして！まるで自分が意気消沈して、暗く陰鬱になりましたので私はお送りできませんでした。布張りしたいわゆる聖さん台の上には二枚の厚ぼったい赤いクッションがあり、そして牧師には厚ぼったい大きなクッションを、牧師補には厚いのを、教会事務員には堅くて、味気ない貧弱なものが置かれていました。

それから十戒の油絵が一枚あったと思います。私はとりわけ神々しい過去帳を読みましたら、貴方もあの退屈な礼拝堂でお祈りされたことが分かりまして、神への儀式が大変に好ましく感じました。私が行った時は貴方の時の牧師がすでに他の司教座へ転任されていました。私は別の牧師の相も変わらぬ説教を聞きましたが、彼もやはり断じて転任して欲しい人物でした」⁸⁾。それに対してラスキンは「私たち二人が飽き飽きして—そして—

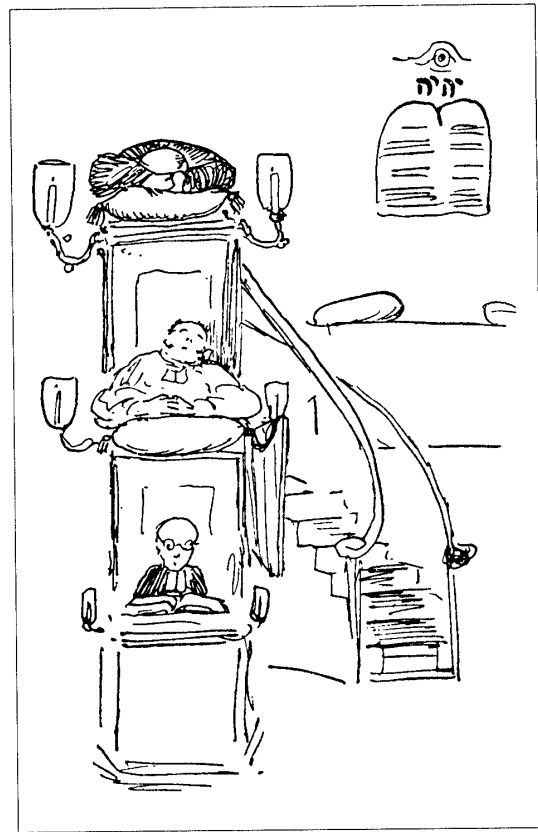


図3 ベレズフォードでの礼拝で、聖さん台の上に二枚の厚ぼったいクッションに顔を埋めていた牧師と、一枚の厚いクッションを用いている牧師補、堅くて味気ない貧弱なものを用いる教会事務員の様子を描いたバーン＝ジョーンズの絵。

ベレズフォード礼拝堂で適切にふるまったことは、言いようのない素晴らしいことではないですか！」⁹⁾と返事を書いたという。

1849年というのは彼にとって非常に熱心な知的活動と感情の高揚の一年であったことは確かである。プライス氏の回顧によると、エドワードが古典部へ移って学校では別れてしまったが、彼はベネッツ・ヒルでバーン＝ジョーンズとは毎日のように会って、そこであらゆることを一緒にしたという。エドワードの学級での予習はギリシア語だけであったので、学校の学習以外の自習が着実に進められた。かのチョイス嬢宛の手紙は、仲よしの友でさえ気付かない方向を彼がめざして強く傾

8) op. cit. , p. 41.

9) op. cit. , p. 42.

倒した広い範囲が表わされており、すでに彼が細かい研究をしていたことも明らかになる。「古代史」も継続していて「天地創造から主の誕生までの古代の年代記概略」を同時に書いていた。その最初の頁の手書き原稿には、非常に小さいが、達筆で、*Diligentia vincit omnia. E. J.* と書かれていた。入念な「イスラエル王とユダヤ王の系譜」や「古語と略語的表記の解説を含めたイギリス詩人用語集」などの部分も残っていた。間もなくして商業部の一番になったコーメルがその年末にはエドワードと古典部で一緒に学ぶことになった。

1850年始めには隣家の女の友だちがすでに結婚してロンドンに住んでおり、ロンドンの彼女の所へ彼女の叔母が訪れてベネツ・ヒルに無事に帰ってきたさいの歓迎の様子を知らせるためにエドワードが書いた手紙にイラストレーションが描かれていた。それを見ると彼の好みが依然としてうかがえる。バーン＝ジョーンズのペットの猫のトムに先導され、彼が走り出てきて彼女の帰りを喜ぶ家族に彼も加わるところが描かれているのである。この手紙の素描で彼の図柄の観念が初めて見えてきた。これまでの彼のイラストレーションは、相互関連のデザインと見える意図がなく、人物と一緒に描いただけの構図にすぎなかった。しかしこの絵ではそのデザインが率直に何かを語ろうとしていることがはっきりしている。ただしこの段階ではまだ彼が美しい素描を見たことがない点にも注意せねばならないし、確かにクルークシャンクのグロテスクな活気に影響されてはいるものの、それが彼の求めている表現の言葉にならないことであるのも明瞭である。

1850年の夏に彼は大英博物館に初めて行ったが、その価値に気付いたのもその時が初めてであった。父親宛にその時に彼が感じたことを手紙に書いている。「・・・今日私は大英博物館へ行ってかなりの時間をニムルードとアシリアの部屋で過ごしました・・・それらの彫刻の明確さや美に驚きました。今では壊れてるところもありますが、バスレーフ（浅浮彫り）は工房から出されたときにはこの上なく見事であったように思えます。人体解



図4. 叔母がロンドンから帰ってきたさいの歓迎の様子を知らせたバーン＝ジョーンズの手紙に描いた絵。彼は猫のトムに先導されて家から走り出ている。

剖も明快でエジプト人のより遥かに優れているのです。手足が彼らの主な研究対象であったようで、腕や脚の筋肉も立派に描写されています。記念碑に豊富に記銘された文章が解読できれば、古代史が新しい脚光を浴び、間もなく真相が引き出されることでしょう。ある黒花崗岩の記念碑には210行の楔形文字文があります。ほとんどのバスレーフには王が一番目立つように構成されていて、野性の牛を狩猟してるのや、敵を追撃しているのもありますが、お守りのような神聖な鳥に付き添われてとりわけ巨大な面積を占めています。

包囲攻撃も非常に面白いものです。大きな破城槌に乗った二人の戦士の一人は矢を放ち、他が二人を盾で防御しているのはとりわけ際立っていました。数人は膨らました皮袋に乗って泳いでいます。包囲攻撃ではまた大きな石を投げ落としたりもしていますし、女性は絶望して髪をかきむしっていて、僧侶は城壁の上で香をくゆらせています。遠くには海面か水面の広がりが見えて、多分フェニキアの海岸かテュロスかシドンなどの沿岸都市の攻略を記念した彫刻でしょう。この後者の都市では私の記憶が間違っていないでしたら、アッシリア王センナケリブ(?-681BC)の第三王子のアッサールハドンに攻め落とされているところです。私が思い出せるのはこのようなものです。

中央の広間にある民族学の部屋も楽しいものでした。動物学の回廊も満足でした。哺乳類の広間も楽しかったし、リュキア、ニムルード、フィガ

ーリア(アルカディアの古代都市)、エルギン、エトルリア、それに何といても化石の部屋では、つい夢中になってしまいました。私は古代について恐らくアッシリアよりエジプトの方が良いので、その部屋でかなりの時間を過ごしました。エジプト人たちは雄大な巨像を喜んだように思えます。四フィート近くの高さがある拳はさぞ巨大な像の一部であったのでしょうか。ところがアッシリアの古代の遺物は大方が四フィートもないくらいのもので、結局一番大きいのも七か八フィートにすぎないのです。エジプトの遺物は主として花崗岩か大理石の彫刻です。アッシリアのは主としてバスレリーフに優れていますが、現在ではまだ立像彫刻が一体しか発見されていないのです。それも頭部は失われてますし、随分と切り取られた部分もあるのです。パルテノン神殿のものを模造したエルギン・マーブルも非常に興味がありました。エトルリアの部屋は主として壺が豊富で、保存もとても良いのです。ルキアの部屋も追加されたばかりで、非常に大きな規模を誇っています。プライスが私と一緒に化石を見たらよかったと思います・・・」¹⁰⁾。それ以来、大英博物館は彼が一生愛着を持つところになった。

彼がナショナル・ギャラリーにある絵画に熱狂しなかったのは不思議に思えるであろうが、絵画というその名称自体が彼の少年時代には退屈であった。というのもカズウェル氏が売り出しで買って帰る陰気な小さな絵や、誰か知らないが家の客間にある家具の一部にするために額縁に入れてもらいに父親の店にたまたま持って来る絵と同じような連想をしたからであった。「私は小さい時は絵がどうも嫌いであった」¹¹⁾と彼はある時述べている。「ロセッティの絵やフラ・アンジェリコの作品を見るまでは、私は絵が好きになれるとは決して思えなかった。彼の時代に描かれていたような絵が嫌いだったのだ」。ラファエル前派を最初に見た彼が即座にその兄弟団の作品を理解した理由は、絵

画の革命自体の解明に用いられそうな意味がそれにかがえたからであろう。

10) op. cit. , pp. 45-7.

11) op. cit. , p. 48.